

9世紀の西地中海－古銭学のデータから¹⁾

カロリーナ・ドメネク=ベルダ

(アリカンテ大学 考古学・歴史遺産研究センター)

阿 部 俊 大 訳

要約：9世紀末から10世紀初頭にかけて、アル・アンダルス²⁾のアミール期³⁾の後ウマイヤ朝を襲った政治的・経済的な諸問題の影響は、貨幣状況にはっきりと現れている。公的な貨幣発行は減少し、9世紀末には実質的に停止するに至ったのである。本稿では、この時期の貨幣状況を分析する。時にはアミール以外の権力による造幣も行われた。複雑な政治的・経済的パノラマの中で、外国から入ってきた貨幣もあった。また、古銭学による情報と城砦群 *ribāt-s*⁴⁾を関連付けるように思われる、一連のデータの分析も行う。

キーワード：古銭学, アル・アンダルス, 後ウマイヤ朝, アミール, 反乱者, 城砦

はじめに

9世紀は西地中海、特にアル・アンダルスが激しく揺れ動いた世紀であった。とはいえこの世紀の諸事象とその影響は、未だにあまり認識されていない。例えば、政治的分裂と既存の権力に対する諸反乱、次第によりはっきりと姿を現してくる商業活動、沿岸部各地に建設される城砦が、それである。これらの事象は、過去数十年の間、歴史学において様々な観点から議論されてきた。その中では、国家が果たした役割、国家の權威の認識、上述の諸事象における——解明されたとは言い難い——大なり小なりの国家の影響、といったものに関する観点を強調しなければなるまい。こ

の点について、貨幣がもたらす情報は、商業流通や諸国の影響圏についてだけでなく、既知の国家のコントロールの外で貨幣を製造する者たちを含めた、発行者である諸権力について、データを提供しうる重要な情報源である。貨幣は直接的また間接的にこれらのプロセスに介在し、貨幣についての分析は、それらのプロセスの複雑さを映し出す。古銭学が提供するデータは——現在の研究状況では、その関係性を明確にすることは難しいにせよ——その他のデータと接近し、補完し合う。以下、貨幣とその諸地域での流通が、9世紀の西地中海、特にアル・アンダルスについて我々に提示する情報を分析していく。

1. 9世紀の西地中海

9世紀、西地中海のイスラーム圏は、大なり小なりアッバース家と関係のある諸家系によって統治される、一連の国家によって分割されていた。それらの国家は、バグダッドのカリフへの従属と、カリフ権力の中心から離れたその地理的位置がもたらす自治との間で、時に揺れ動いていた。イベリア半島においてウマイヤ家はその権力を確立しようとする間、北アフリカは、あいまいな境界線を持つ、幾つもの独立的領域に分断されていた。2つの王朝、イドリース朝とアグラブ朝が、この地域の大きな部分を支配していた。それにリーフ地域ナクルのサーリーフ朝、大西洋岸のバルガワータ族の王朝、マグリブ中部のルスタム朝と、キャラバンルートを通じてサハラ南方の金が到着する（図1）、アトラス山脈の南のシジルマーサのミドラル朝が並び立っていた。

イドリース国家は、北アフリカ最西部の大きな部分を支配していた。ヒジュラ暦（イスラーム暦）172年／西暦（キリスト教歴）789年に、イドリース1世が幾つかのベルベル部族の支持を得て同国を建国した。彼とそ



図1 9世紀末の西地中海

http://www.qantara-med.org/qantara4/public/show_carte.php?carte=carte-02 より作成。

の後継者たちは、現在のモロッコの中中部・南部とアルジェリア西部地域の領域的支配を達成した。この領域は、ヒジュラ暦 213 年／西暦 828 年のイドリース 2 世の死後、彼の息子たちの間で分割され、以後、完全に統一された国家になることはなかった。にも関わらず、イドリース朝権力は経済的拡大を享受した。それは 1 つには、支配領域の結節点を成す諸都市の建設によるものであり、1 つには、鉱物資源の輸出によるものであった。数多くの造幣所で作られた銀貨の発行が、この経済的繁栄の最も明らかな印であった (Manzano 1998, p.354)⁵⁾。

9 世紀の西地中海で貨幣を発行したもう 1 つの大きな王朝は、アグラブ朝である (ヒジュラ暦 184-296 年／西暦 800-908 年)。その支配は、今日のアルジェリア東部からチュニジアに及んでいた。ヒジュラ暦 184 年／西暦 800 年にカイラワーンの知事であったイブラーヒーム・ブン・アルアグラブが、当該地域の幾つかの反乱を鎮圧し、カリフのハールーン・アッラシードからアミールと認められたのがこの王朝の始まりである。このよう

にして、世襲の自治的な王朝権力が、アッバース家のカリフの勢力下に、その支持を受けつつ成立した。バグダッドのカリフは、アグラブ朝を承認する代わりに、絶え間ないベルベル人の反乱や、とりわけ、イドリース家やウマイヤ家のようなアッバース家に対抗する他の王朝に対して、地中海西部の領域に一定の秩序と安定を維持しようと意図していたのである。アグラブ朝は、イフリーキヤにおけるアッバース朝の権益を保証するという役割を利用することを心得ており、バグダッドへの従属と独立の間で揺れ動いていた。それを示すのが、カリフの排他的な特権であった、金貨製造を行ったという事実である。その全ての貨幣の銘文には、アミールたちの名前が含まれ、カリフの名前には一切言及されていない (Al-'Ush 1982, p.18)⁶⁾。同朝は、国家自体によって、また個人主導の建設を奨励することによって、多くの城砦を建設した。C. マルティネスによると、これらの城砦は、目立って宗教的な性格を有しており、軍事的な構成要素——本来この設備が前提としており、チュニジアのサヘル地帯の場合は発展するに至らなかったもの——は希薄であった。その建設は、反抗的なマールク派をコントロールし、また中央集権化を促進するべく、軍事集団の手中にある地方支配を解体させるためのものだったからである (Martínez Salvador 1997-98, p.267)。

アグラブ朝とイドリース朝の間であって、中部マグリブには、ルスタム朝のような、領域的境界が明確でない、多くの自治的な政体が存在していた。ルスタム朝の権力は、部族的でほとんど構造化されていない性格が顕著であり、発展した行政機構が欠如していて、その首都ターハルト (ティアレ) は重要な経済的・商業的な中心であったにも関わらず、貨幣を製造するには至らなかった。ターハルトは東西を結ぶ交易をおこなうユダヤ人商人たちの市場を含む、マグリブと地中海の市場に金と奴隷をもたらすサハラ越え交易ルートの重要な中継地であった⁷⁾。

地中海の対岸では、バグダッドのカリフから政治的に独立していた後ウマイヤ朝が、9世紀半ば、衰退過程に入っていた。同世紀後半におけるアミールたちの権力の弱体化は、他の諸事象に加え、財政的な無能力に表れていた。税の支払いをやめる家系や地方のボスが現れ、多くの領域がコルドバ〔※後ウマイヤ朝の首都〕の権力による直接的なコントロールを免れていった。このプロセスは、世紀を通じて加速していき、ムンジル（ヒジュラ暦 273-275 年／西暦 886-888 年）とアブド・アッラー（ヒジュラ暦 275-300 年／西暦 888-912 年）の統治下では特に顕著となり、アンダルスの領域のかなりの部分は政治的に分裂し、公的史料が「反乱者たち」と呼ぶところの人物や家門の支配下に置かれ、最初の内戦として知られる事態に至った。それは実際には、多くの場合、本来の意味での反乱というより、弱いアミール権力の支配に対する、地域に強く根を張った諸家系の側からの、特に——コルドバに持っていかれて何の代償も無い——税の支払いに対する抵抗であった⁸⁾。アシエンが指摘しているように（1997, p.77）、貢納の横領はこの抵抗の第一段階であり、徴収、すなわち財政のかなりの部分の奪取であって、アミール支配に対する反発の最も明白なしるしの一つであった。これらの「反乱者たち」と呼ばれる者たちの多くは、実際のところこの、税の私物化の段階に留まっていた（Salvatierra 2001）。これらの独立政権には、ムラディ〔※イスラームに改宗したキリスト教徒。西ゴート貴族の家系なども含む〕もいれば、コルドバから彼らを分かち地理的距離を利用して独立した支配を行う、アラブの古い家系もあった。状況はムハンマド1世（ヒジュラ暦 238-273 年／西暦 852-886 年）統治末期に悪化した。アミール国の首都から離れた地域に加え、セビーリヤやマラガ、グラナダやハエンといった〔※首都に近い〕南部の地域まで支配から逃れ始めたのである。この状況は、徴収の欠如のために収入が激しく減少したであろう、後ウマイヤ朝による銀貨発行の突然の低下に明確に反映さ

れている。また、発行者について議論の余地のある、銅貨の出現とも時を同じくしている。それらの銅貨には、この金属の貨幣では普通あまり無いことだが、製造の日付が記されていた。

2. 9世紀後半のアンダルスにおける貨幣発行状況

アミールの権力の弱体化は、貨幣政策において、発行回数の目立った減少と、発行された貨幣量のかかなりの低下という、特に顕著な形で現れた。貨幣の発行回数の減少傾向は、9世紀の第4四半期の始まりには看取されるが、次第に加速度的にまばらになっていき、同世紀末にはほぼ行われなくなるに至った。このようにして、貨幣発行はムハンマド1世の治世に減少し、ムンジルの治世にはかなり乏しくなり、アブド・アッラーの統治初期には極めて稀となり、ヒジュラ暦281年以降は行われなくなった⁹⁾。A. カントとE. マルサルの研究(1986)と、M. カストロの研究(2001)の間で、年代的な相違はほとんど無い(図2)。古銭学的な証拠もこの点で明らかである。ヒジュラ暦281年/西暦894-895年以降の貨幣は、現在まで発見されていない。この年以前にアブド・アッラーが発行した貨幣も、一括出土銭の実質的な総量の中では、とるに足らない量である¹⁰⁾。唯一の公式な貨幣製造工場であったコルドバの造幣所は、この時期に閉鎖されざるを得ず、ヒジュラ暦316年(西暦928-929年)——イブン・ハイヤーンの記録によると、この年に造幣所が再開された¹¹⁾——まで活動を停止していた。このように、アンダルスでは、後ウマイヤ朝による公式な貨幣発行は、ほぼ40年に渡り——少なくとも銀貨に関しては——事実上行われていなかったのである。

銅貨も、やはり数が乏しく、発行者について多くの問題が示されている。この年代には、公式な製造によるものかどうか確かでない、幾つかの

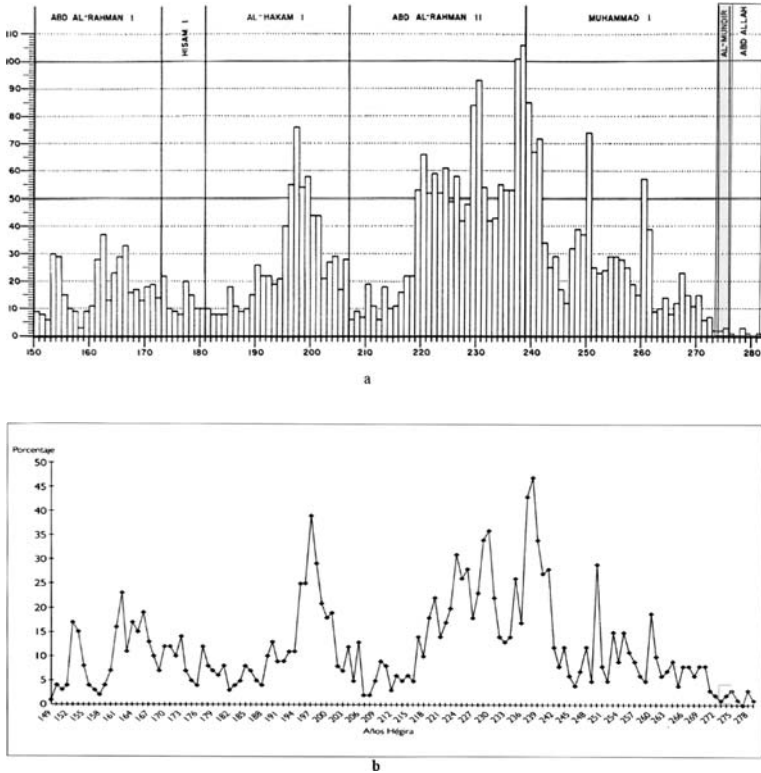


図2 アミール期の貨幣発行量

a は A. Canto, E. Marsal, 1986 より。b は M. Castro, 2000 より。

ファルス銅貨が知られている¹²⁾。多くの場合、造幣所と日付が記されておらず、貨幣自体に記された個人名や、またディルハム貨との碑銘学的な類似によって、個別のアミールの発行によるものと推定されている。このようにして、幾つかの銅貨がムハンマド1世（ヒジュラ暦 238-273 年／西暦 852-886 年）のものとした。幾つかの貨幣は、銘にヒジュラ暦 268 年と 270 年（西暦 811 年 2 月と 883 年 4 月）と記されているのが認められ、そのため、このアミールによる公式な発行貨幣とみなされた。他の貨幣では、発行年は記されていないが、銀貨が発行された際の銘との類似や、銀

貨・銅貨の双方に看取される特定の装飾によって年代が決定された。また、ハラフやウマル、アブド・アッラフマーンといった、ファルス銅貨に現れる幾つかの固有名詞と、デイルハム貨に現れる固有名詞の一致から、ムハンマド1世のものとしてされたこともある。無論、この発行者同定の方法は、完全に信頼できるものとは認めがたい。特に、広く共通して使われる固有名詞の場合はそうである。とはいえ、ヒジュラ暦268年／西暦881-882年のデイルハム貨にも現れるウマルという名の存在は、この名前が現れるファルス銅貨が、その年のものであると見做すことを可能にする。アブド・アッラフマーンという名前も、同じように利用されている。デイルハム貨には現れないが、幾つかのファルス銅貨にはウマルと共に現れるからである。固有名詞の3つ目、ハラフは、ヒジュラ暦269年／西暦882-883年のアンダルスのデイルハム貨に現れる。このことは、それらの貨幣をムハンマド1世が発行したものとする論拠とされてきたが、実際には、その名はアグラブ朝のヒジュラ暦226-228年と236年（西暦840-843年と850-851年）のディーナール貨にも現れるのである。近年、それらの貨幣のうち何点かが、タンジェの造幣所と関連付けつつ、北アフリカ由来のものとしてされている¹³⁾。

同じように、アブド・アッラー（ヒジュラ暦275-300年／西暦888-912年）が発行したとされるファルス銅貨についても時に議論される。幾つかのものはヒジュラ暦282年／西暦895-896年の日付を示しているが、それが公式な発行なのかは不確かである。彼の治世の初期から造幣所が活動していなかったことを考慮すると、なおさら疑わしい。その他の、日付は無いが、裏面にフサイン・ブン・アーシムの名がある貨幣も、このアミールのものとされてきた。ヒジュラ暦279年／西暦892-893年のデイルハム貨に現れるフサインとの類似がその理由である¹⁴⁾。

いずれにしても、アミール期末期のファルス銅貨は、アンダルスでは極

めて数が少ない。銀貨の発行もやはり数が乏しく、後には存在しなくなり、ファルス銅貨の数の少なさと共に——おそらく、先行する支配者たちの貨幣の存続によって部分的には軽減されたであろうが——貨幣欠乏の原因となったであろう。多くの領域がアミールの支配から脱していた、分断されたアンダルスにおける貨幣不足の状況は、財政的徴収能力を大きく低下させ、他の権力者——とりわけ、覇権を目指す連中——による貨幣発行や、地中海の他の地域に由来する貨幣の到来の原因となりえたであろう。しかし、後ウマイヤ朝の枠組みの外での貨幣発行は非常に補助的で数が少なく、発見された外国の貨幣の割合も極めて少ない。古銭学的な証拠によれば、アンダルスにおける貨幣供給の停止は、相当量の外国貨幣の流通も、自立的な権力者たちによる貨幣発行も引き起こさなかった。イブン・ハフスーンのような、長期間にわたって独立を維持し、国家固有のシンボルや紋章を用いて王朝を作ろうとした連中すら行っていない¹⁵⁾。唯一、トゥドミール地方のダイサム・ブン・イスハークのみが自分の名で貨幣を発行している (Doménech, Guichard 2015)。その他の者については、我々は依然、貨幣発行をしていたと断定するに足るデータを持ち合わせていない。

3. アル・アンダルスにおける外国貨幣の乏しさ

古銭学的な証拠によれば、アル・アンダルスにおける貨幣発行の減少は、偶発的な場合を除いて、外国貨幣の流通によって相殺されたわけではない。他のイスラーム国家が9世紀に発行したイベリア半島における個別発見貨は非常に数が少なく、周辺のまた散発的な存在すら想定しがたい。より後の時代に、例えばファーティマ朝の貨幣のような他の貨幣によって生じた現象と、比べられるようなものは何も無い。外国の銀貨の存在は、

偶発的で数も少ないものだと考えられている (Canto 2002, p.115)。一般により狭い範囲で流通し、造られた土地から離れた地域の個別発見貨中には余り現れない、銅貨についても同じ現象が生じている¹⁶⁾。基本的に大規模な取引により適した外国の金貨も、アンダルスでは少ない。アグラブ朝が発行した金貨はアンダルスの領域によく見られたものであり、部分的にせよ、後ウマイヤ朝による金貨発行の欠如を代替していた、と伝統的に考えられてきたのではあるが。

研究者たちは、後ウマイヤ朝による金貨発行の欠如を受け、9世紀のアンダルスではアグラブ朝のディーナル貨が流通していたと、たびたび主張してきた¹⁷⁾。しかしながら、その証拠となる発見貨について、10年以上も前にカントは「現状では、それらを収集物の中に見出すことは難しい」と述べ、まとまった量のアグラブ朝貨幣については、バレンシア・デル・ベントソ (バダホス) で見つかったカリフのディーナル貨幣群に関して、一度言及されているのみだとしている (Canto 2002, pp.111, 118)。貨幣群を構成する貨幣の型の情報も枚数の情報も無いこの言及以外には、ごくわずかな例しか知られていない。ポルトガル沿岸部のアラビダのアズイアで見つかった、ヒジュラ暦 167年／西暦 783-784年のディーナル貨 1枚 (Telles 1999, pp.133-138)。コルドバからの、ヒジュラ暦 247年／西暦 861-862年のもう1枚 (Canto 2002, p.111)。そして造幣所の書かれていないヒジュラ暦 286年／西暦 899-900年の、アルメリアのイノクス・デ・カブレラで見つかったもの2枚 (Fontenla 2007, p.155)¹⁸⁾。例えばウマル・ブン・ハフスーンのような、何人かの独立した権力者は同王朝と密接なコンタクトを持っていたにも関わらず、現状ではこれらが、確実にアンダルスで見つかった、アグラブ朝の金貨のすべてである。アグラブ朝は、9世紀を通じ、この地域におけるアッパース朝権力の代理者として、また帝国の極西部における秩序の担い手として、唯一、金貨発行の特権を得て

いたのだが、彼らによって発行された大量の貨幣は、イベリア半島にほとんど痕跡を遺していない。北アフリカにおいても、発行された量の多さにも関わらず、あまり残っていない。アル・ウシュ（1982, p.22）によれば、ファーティマ朝によって造幣され直したためである。

銀貨の造幣地には大きな多様性が見いだせる。金貨は、我々が扱っている時代の西地中海の領域では、アグラブ朝によってのみ発行されていたのだが、銀貨は対照的に全ての国家によって発行されていた。しかしながら、既知の銀貨の数は、3つの王朝のものにしてはかなり乏しい。アッバース朝のディルハムが、アンダルスが発見貨では最も頻繁にみられるものであり、それに対しアグラブ朝とイドリース朝のディルハムはより少ない。これらのディルハムは、アンダルスにおいて、単に二次的な、また偶発的な形で見つかっており、アンダルスの貨幣流通におけるその影響は、非常に少なかったに違いない。

アッバース朝のディルハム貨は、一括出土銭群の一部として発見されてきた。イスナハル（グラナダ）の出土銭群からは、2枚が発見されている（Canto, Marsal 1988）。プエブラ・デ・カサージャ（セビーリャ）からは、バグダッドでヒジュラ暦153年／西暦770年と、ヒジュラ暦180年／西暦796-797年に発行された、2枚のディルハム貨が見つまっている。カラトラバ・ラ・ビエハ（シウダー・レアル）で見つかった貨幣群からは、サマルカンドでヒジュラ暦234年／西暦848年に発行された、カリフのムタワッキルのディルハム貨1枚が見つまっている（Canto 2002, p.113）。プリエゴ・デ・コルドバの貨幣群からは、ヒジュラ暦241年／西暦855-856年の同じカリフの貨幣が1枚（Carmona, Hinojosa 1999）。ドミンゴ・ペレス（グラナダのイスナジョス）からは、ヒジュラ暦239年／西暦853-854年のエジプトの造幣所のディルハムが1枚（Vega, Peña 2002）。そしてアッバース朝のディルハムの破片群を含むエストレマドゥーラの出土銭群が

ある¹⁹⁾。貯蔵されていたものではない、散逸貨幣の発見貨に関して言えば、トルモ・デ・ミナテダ（アルバセーテのエリン）において、アッパース朝のディルハム貨1枚が記録されている（Doménech, Gutiérrez 2006）。

アグラブ朝の銀貨に関しても、アンダルスの領域では、偶発的で少ない量しか見つかっていない。異なる出所を持つ、5つの事例が知られている。セビーリヤのレンテフェラの出土銭群から見つかったディルハム貨1枚（Ruiz 1967, pp.28-29, n.175）。ヒジュラ暦226年／西暦840-841年のプエブラ・デ・カサージャの出土銭群から、ディルハム貨の断片1つ（Ibrāhīm, Canto 1991, pp.71-72）²⁰⁾。アルメリア地方では、ディルハム貨がもう2枚見つかっている。1枚はアンダラクス渓谷で、もう1枚はカサ・バハ・デ・トレメセンで。後者はイブラーヒーム2世の時代のものである（Fontenla 2007, pp.324, 155）。先述のエストレマドゥーラの貨幣群の中の破片群も、付け加えなければなるまい（Martín 2012, p.340）²¹⁾。さらに、カラタユーにおける奇妙な発見貨の情報も言及しなければならないだろう。カロリング朝のデナリウス貨と一緒に見つかった、金属も、貨幣の種類もわからないアグラブ朝の貨幣である（Martín 他 2004, pp.78-79, n.33）。

アンダルスに貨幣を流通させていた王朝群の掉尾に、イドリース朝が挙げられる。しかし、発行量の多さや地理的な近接にも関わらず、出所が確かな発見貨に関して、アンダルスにおけるイドリース朝の貨幣は非常に乏しい。イドリース朝は、8世紀末より、数多くの造幣所で相当量の銀貨を発行した。これらの貨幣は非常に遠隔の地域、近東やコーカサス地方、ロシアやバルト海沿岸、スカンディナヴィアなどでも見つかっているが（Manzano 1998, p.354）、興味深いことに、アンダルスでは極めて稀にしか現れない。出土銭との関係だけに限定しなくても、実際のところ、古銭学の文献においても、イドリース朝銀貨の存在はほとんど言及されていない

い。ドミンゴ・ペレス（グラナダのイスナジヨス）の出土銭群から、ヒジュラ暦 226-227 年，231 年／西暦 838-846 年の 3 枚のデイルハム貨が見つかる（Vega, Peña 2000-2001, p.88, nn.486-488；2002, p.188, nn.365-367）。また，プエブラ・デ・カサージャの 902 点の出土銭群からは，ヒジュラ暦 247 年／西暦 860-861 年の日付のデイルハム貨の破片 1 つが見つかる（Ibrāhīm, Canto 1991, p.71）。

銅貨に関しては，状況はそれほど明白ではない。ファルス銅貨では造幣所や日付，発行者の情報が欠如しており，このことが出所についての問題を生じさせ，時に，アンダルスで発行されたものと，他の場所から到来したものの区別を困難にする。そこに，固有の性質と価値の低さから，ファルス銅貨は発行地から遠くない範囲で流通するという事実が加わる。とはいえ，幾つかの外国貨も知られている。例えば，コルドバ地方の，9 世紀初めにエジプトで発行されたアッバース朝銅貨の出土銭がある（Rodríguez 2006）。アグラブ朝銅貨は，バダホスのマギージャや，同じくバダホスのバルベルデ・デ・ジェレーナ・フエンテ・デル・アルコなどの場所で発見されている（Martín 2012, p.333）。コルドバの埋蔵物からは，ローマの銅貨群や，2 枚のアグラブ朝銅貨，また読解が困難だがおそらく同じアグラブ朝のものと思われる 13 枚の銅貨を含むイスラーム銅貨群が現れている（Navascués 1958, p.53）²²。これらは全て，9 世紀前半に発行されたものである。アグラブ朝のムハンマド 1 世の統治下（841-856 年）では，この王朝が銅貨を発行し続けていたという情報が無いからである。イドリース朝のファルス銅貨について言えば，アンダルスの領域を流通していたと考えられている。椰子の装飾や「アリー」という名前の存在といった碑銘学上の特徴に基づいた見解から，銅貨の一部がこの王朝のものと思倣されているためである（Roma 他 2004）。

このように，外国の貨幣は，アンダルスの貨幣流通において，ほとんど

影響力を持っていなかった。そこでは、公式な発行も数がごく少なく不十分であった。アミールの支配から脱していた権力者たちも、一般に、貨幣供給の問題を緩和するだけでなく、彼らの一部が望んでいた、国家のイメージを形成するのにも役立ったであろう、貨幣の発行をしなかった。例外は——事情や動機は異なっているが——トゥドミールのダイサム・ブン・イスハークと、独立共和国と呼ばれるベチーナの船乗りたちの事例だけのような（Doménech, Guichard 2015）。

4. 「反乱者たち」の貨幣

9世紀後半、多くの領域が後ウマイヤ朝のアミールの支配から逃れ、在地の有力者の支配下に置かれていた（図3）。この事実と、またほとんど



図3 アミール期末期の状況

実線はイスラーム圏とキリスト教圏の境界を、点線が囲む範囲は、反乱者たちの勢力圏を示す。

<https://fineaggm.wordpress.com/tag/mapas-historicos> より作成。

40年もの間、実質的に公式な造幣が存在していなかったにも関わらず、これらの「反乱者たち」が貨幣を鑄造したという明らかな古銭学的な証拠は、1つの事例しか存在していない。トゥドミールにおけるダイサム・ブン・イスハークの事例である。その他には反乱者による貨幣はまったく知られていない。そのうちもっとも有名な、880年頃から917年に死ぬまでの間、アミールを追い詰め、自分の後継者を太子 *walī al-'ahd* に任命するなど、覇権を誇示するに至ったウマル・ブン・ハフスーンですら貨幣発行は行っていない。手に入れた権力と、史料が示す北アフリカ、特にアグラブ朝と築いていた関係を考えれば、自身の権力を正当化するために、貨幣を発行するのも妥当と思われるのだが²³⁾。19世紀から、コデラなど、何人もの研究者がこのように考え、実際、彼が何枚かの貨幣を発行したものと考えていた²⁴⁾。ウマルという名が記された、一連のファルス銅貨がそれである²⁵⁾。マイルズは、名前の一致に基づいて、——それ以外に根拠が無いと認めてはいるが——それらがウマル・ブン・ハフスーンによって発行されたものと考えた (Miles 1950, pp.63, 75)。同じ理屈で、ハラフの名が記された他の複数のファルス銅貨が、ウマル・ブン・ハフスーン発行によるものとされることもあった。ハラフは、ハフスーンの財務役人の1人の名前であろうと考えられたのである。それらについては、近年、北アフリカで作られたものという意見も出されている (Francés 他 2013)。いずれにせよ確かなのは、現在のところ、確実に彼が発行したと言える貨幣は全く無いということである²⁶⁾。

最初の内戦の間に独立的な地位を得た他の人々についても、貨幣を鑄造したという確かな証拠は無い。バダホスのムラディであるイブン・マルワーン・アル・ジッリーキーや、セビーリヤのイブラーヒーム・ブン・ハッジャージュといった人物である。後者は、王 *malik* の称号、軍隊の維持、その生産物の上に支配者の証として彼らの名前を記させるための銘文

帯（ティーラーズ *tirāz*）の維持といった、幾つかの君主固有の標章を用いていたのであるが²⁷⁾。マイルズは、日付も造幣所の名前も無く、*glb* という銘と、裏面にイブラーヒームという名前が書かれている幾つかのファルス銅貨を、彼の発行したものとする可能性を主張した（G. C. Miles 1950, p.55）。フロチョソもまた、再度名前の一致に基づいて、この考えに賛意を示した（R. Frochoso 2001, p.91）。しかし、同じ貨幣について、フォンテンラはベチーナの船乗りたちが発行したものだと考えている（S. Fontenla 1996）。また、アル・ウシュは、異なっている点は周囲の銘の欠如だけだとして、それらの貨幣をアグラブ朝のイブラーヒーム1世か2世の発行した貨幣の中に入れて²⁸⁾。

これらの議論の余地のある貨幣群に対し、アミール権力以外による貨幣鑄造の、古銭学的に唯一確かな証拠は、ウマル・ブン・ハフスーンの「騎士たち *fursān*」の一人、アンダルス東南のトゥドミールの領域を支配したダイサム・ブン・イスハークに関するものである。彼については、イブン・ハイヤーンを通じ、軍事的能力と多くの支持者を有していたこと、またヒジュラ暦283年／西暦896年にコルドバのアミールが税を徴収するために、彼の支配領域に軍を派遣したことが知られている²⁹⁾。イブン・ハフスーンと結びついた権力者であったと思われるが、ウズリーは、彼がトゥドミールで銀山を発見し、自分の名でデイルハム貨を鑄造したと述べている³⁰⁾。この断定は、3枚の発見貨によって証明された（図4）。ロルカの南東のウヘハル城の半デイルハム貨1枚（Fontela 1995）。カステイーリヤ・レオンの領域にあるカバナスで発見されたデイルハム貨1枚（Doménech, Guichard 2015）。そして、出所不明のファルス銅貨1枚である（Frochoso 2002）。半デイルハム貨は、裏面のクルアーン112節の章句——アンダルスのデイルハム貨に特徴的な銘——を、ムハンマドの預言者としての召命に置き換えることで、アグラブ朝のモデルに従っている。デイルハム貨は



Peso: 2,05 g. Módulo: 28,5 mm. Año 293 H./905-6 J.C.



Peso: 1,3 g. Módulo: 20 mm
Año 277 H./890-1 J.C..

Peso: 1,3 g. Módulo: 19 mm.
¿Año 288 H./900-1 J.C.?

図4 ダイサム・イブン・イスハークによるディルハム貨・半ディルハム貨・ファルス銅貨

R. Frochoso, 2002, S. Fontenla, 1995, C. Doménech, P. Guichard, 2015 より。

Peso : 重量 Módulo : 寸法 Año : 年

より後の年代のもので、ダイサムに貢納の支払いを強いたアミールの遠征より後のものであり、アンダルのディルハム貨の特徴的な銘——ファルス銅貨にも、銅貨であるにも関わらず、この銘が記されている——を維持している。3枚すべてにおいて、裏面の中央の銘の下に、ダイサム・ブン・イスハークの名が記されており、このため、彼が発行したことは疑いない。これらの貨幣の発行された日付は、半ディルハム貨の場合、ヒジュラ暦 277 年／西暦 890-891 年であり、ディルハム貨はヒジュラ暦 293 年／西暦 905-906 年である。このことは、ダイサム・ブン・イスハークが度々、少なくとも 15 年離れた 2 度に渡って、貨幣を鑄造したことを示している。とはいえ現状では、発見貨の少なさが示すように、発行が一時的なものであったのか、一定の継続性を有していたのかはわからない³¹⁾。

古銭学的な証拠と並び、アラビア語史料の情報も、短くはあるが大変興

味深い。特に貨幣鑄造への言及があるからだけではなく、コルドバへの貢納の不払いが、当該領域が後ウマイヤ朝の支配下になかった最も明白な証拠の一つであること、そしてコルドバからのこれらの反乱者たちの領域への遠征が、明白に財政的性格を持っていたことを示しているからである。ダイサム・ブン・イスハークの事例では、ウズリーのテキストは、軍事遠征の結果、彼が租税の一部を譲るよう強いられたこと、その際にアミールのアブド・アッラーの名前でデイルハム貨を鑄造したことを断言している³²⁾。また、イブン・アルクーティーヤの記述は、遠征が財政的な性格のものであったことを明らかに示している。將軍はダイサムに対し、支払い義務があり、かつ何年も払ってこなかった貢納を支払うこと、またダイサムの反乱を踏まえて、最初に請求した額の2倍の金を支払うように命じている。ダイサムが金を支払うと、軍は帰途に就いた³³⁾。つまり、アミールはこの遠征によって、領域を支配することもダイサムを服従させることも、鉱山を支配することさえも意図しておらず、単に税を徴収するだけで満足したのである³⁴⁾。

異なっているのが、大なり小なり強制されてアミールの承認を得た、共和国と呼ばれるペチーナの事例である。この領域は、フォントネラ(1996)の意見によれば、アグラブ朝の発行するモデルに従いながら、銅貨を鑄造したのである。

5. 船乗りたち *bahriyyūn* とペチーナの船乗り共和国

ヒジュラ暦 271 年／西暦 884 年頃、船乗りたちがペチーナを築いた。これらの船乗りたちはイルビーラとトゥドミールの出身であり、875 年にテネスを築いてからアンダルスに帰還した。イブン・ハイヤーンによれば、アミールのムンジルとアブド・アッラーの許可を得ていた³⁵⁾。ペチーナの

建設は、現在のアルメリア海岸で行われた。イエメン系アラブ人たちが居住する地帯であり、彼らはアブド・アッラフマーン1世(756-788年)と2世(822-852年)の時代に、海を監視するべく、この海岸地域に定住させられていた(Roldán 1995, p.83)。レヴィ・プロヴァンサル(1950, p.351)は、アブド・アッラフマーン2世が彼らに恒久的に城砦に留まる使命を与えたとしている。ペチーナには2つの城砦が建てられた。アスアルの考えでは、1つはイエメン人たちが建てたペチーナの見張り塔に、もう一つは都市アルメリアのペチーナ門に建てられたフシャイニーの城砦にあたるとしている(Azuar 1995, p.69)。

この船乗りの共和国は、自分たちで元首を選出し、自治的な統治の下にあったが、コルドバとのコンタクトも維持していた。両者の関係をもっとも明らかに示すものの一つが、ペチーナの人々の、アミールに対する、彼らを選んだ元首の承認を求める請願である。この独立的な統治はほぼ40年続いた。ヒジュラ暦310年/西暦923年に「彼らは従属に傾き…恩赦を取り決め、税を割り当てられた」³⁶⁾。ヒムヤリーによれば、この間、ペチーナの共和国は、国土を破壊する諸反乱から逃れようと望む、新たな住民たちであふれていた³⁷⁾。この地は北アフリカの諸港に向け、戦略的に恵まれた位置にあり、地中海で最も重要な商業拠点の一つとなった。ペチーナの船乗りたちは、北アフリカとの交易に従事していた。そこから穀物などの生存のために必要な生産物だけでなく、織物や奴隷のような交易品も補給し、東方の物産や珍品まで扱うこともあった(Lirola 1993, p.391)³⁸⁾。10世紀のアラブの地理学者たちは、ペチーナの繁栄を、スラヴ人(白人)奴隷 *saqāliba* の去勢を専門としていた、近隣のユダヤ人集住地の存在とはっきり結び付けている。ギシャールは、彼らを商人兼海賊と見做し、アンダルスの海上活動の主要な中心となって、これらの船乗りたちが築いた他の中心地、テネス、オランやタルカの支援を得ることが出来たと考えて

いる (P. Guichard 1995, p.42)³⁹⁾。

おそらく、この海の共和国の自治と商業活動への従事が、貨幣の発行の原因となるファクターだったのだろう。ただ、如何なる史料も、貨幣の発行に言及していない。とはいえ、フォンテンラは、アグラブ朝の銘である **glb** を記した何枚かのファルス銅貨をペチーナの元首が発行したものと見なしている (S. Fontenla 1996)。この著者は6タイプの貨幣をみとめている。5つはビバス——彼はそれらの貨幣を反乱者たちの貨幣の中に分類している——の類型に基づくもので、1つは公刊されていないものである⁴⁰⁾。この見解は、1つには、これらの貨幣に記されている名前のうちの2つが史料に現れるペチーナの元首のそれと一致していること、また1つには、これらの貨幣のうちの何枚かがアルメリア地方において発見されたことに基づいている。

イブン・ハイヤーンによると⁴¹⁾、ペチーナの元首たちのうちの1人がイブン・カシーであった。彼については、ヒジュラ暦302年／西暦915年の末に死んだことしか知られていない。フォンテンラは、造幣所や日付が記されていないが、裏面の銘の下にこの名前が書かれ、銘の上に修飾語句 **glb** が掛かれたファルス銅貨を、彼が発行したものと考えている (ビバスのタイプ338)。このイブン・カシーの後継者となったのが、弟で短期間の元首だったマスウード・ブン・アリーで、ヒジュラ暦302年／西暦915年の終わりに任命され、翌年に解任されている。マスウード・ブン・アリーはその職務に1年も留まらなかったのだが⁴²⁾、彼が発行したとされるファルス銅貨は一連の中で最も数が多い⁴³⁾。彼の後任であるアブド・アラフマーン・ブン・ムタッリフは、縁取りが無く、その名前が書かれ、しかし **glb** という銘が書かれていないファルス銅貨の発行者とされている (Frochoso 2001, p.81)。これらのペチーナが発行したと考えられているファルス銅貨はすべて、共和国が存在していた最後の時期に鑄造されてい

る。アブド・アッラフマーン3世が未だアミールを名乗り、コルドバの公的な造幣所が閉鎖されていた時期である。

以上が貨幣に記された名前と史料で言及されたペチーナの元首たちの一致である。例えばアブド・アッラザーク・ブン・イーサーのような、より前の時期の元首たちについては、古銭学的な一致は存在しない。とはいえ、その他の史料で言及されていない名前が記された、同じ特徴を持つファルス銅貨もまた、ペチーナ発行のものとされている。幾つかのものは、glbの修飾語句が記されているだけでなく、アルメリア地域で見つかったためである。アブド・アル・バッルやムーサーの名前が記されているファルス銅貨がそれである。前者については、リオハとサンタ・マリア・デ・ニエバで見つかった、2枚の例が知られている。後者は、ティハンで1枚が見つまっている (Fontenla 1996, 312)。残りの2つのタイプ、イブラーヒームの名が記されたもの (Vives 340 タイプ) とイブン・バフルールの名前が記されたもの (Vives 343 タイプ) については、この地域で貨幣が発行されたという記録は無いが、アグラブ朝のモデルに従った、先述した貨幣群との類型学的な類似から、フォンテンラはペチーナが発行したものと考えている⁴⁴⁾。これらのファルス銅貨の一部は、誰が発行したものか議論が定まっておらず、イブン・バフルール Bahlūl またはブフルール Buhlūl と読まれる名前が記されている貨幣群が議論の中心となっている。

6. バフルール家と城砦

ペチーナのものとされるファルス銅貨の中で、イブン・バフルールの名前が記されているものは特に興味深い。この一連の銅貨は、基本的に2つの異なるタイプに分かれる。1つは周縁部に銘が無く、したがって、造幣所名と日付がない。イブン・バフルールの名は表裏両面に、それぞれ銘の

Ibn Bahlul
VIVES 343
MILES 181-i-j
1,95 g / 21 mm

بھلول

غلب

بن بھلول



図5 イブン・バフルールの名があるファルス銅貨
表面・裏面とそれぞれの銘 *glb*. D. Francés y R. Rodríguez, 2010 より。

下にあり、*glb* という修飾語句が加えられている (図5)。これらのアグラブ朝の銘を示す貨幣に加え、第2のタイプのイブン・バフルールと記された貨幣がある。こちらのファルス銅貨には、前者と異なり、造幣所と铸造された年が記されている。これらはアンダルスで铸造され、ヒジュラ暦303・305・306年／西暦915-919年のものが知られている⁴⁵⁾。こちらではアグラブ朝への言及が無い。イブン・バフルールも両面ではなく、裏面の銘の後ろにのみ記されている。

古銭学の分野からは、これらの貨幣に名が現れるこのイブン・バフルールを同定するため、幾つかの試みが為されている。アル・ウシュは、疑いなくアグラブ朝に関係する人物、史料に現れる敬虔な人物か学識有る信徒の子孫だと見做している。たとえば、カイラワーンの高名な信徒で、ヒジュラ暦181-183年／西暦797-800年に死んだアル・バフルール・ブン・ラシードのような (al-Ush 1982, p.37)⁴⁶⁾。ヒジュラ暦230年／西暦844-845年に死んだ学識有る信徒のバフルール・ブン・アムル・ブン・サーリフのような⁴⁷⁾。或いはジヤーダ・アッラー3世の時代のカイラワーンの他の有名な信徒、バフルール・ブン・ウバイダのような。アル・ウシュは、貨幣

と関連付けてはいないものの、イブン・ハルドゥーンによる他のバフルールについての記述も採取している。イドリース国家の摂政の地位にあったベルベル人のバフルール・ブン・アブド・アッラフマーン・アルムザッファルであり、アグラブ朝の支配者イブラーヒーム2世（ヒジュラ暦261-289年／西暦874-902年）は、贈り物によって彼の好意を得ようと試みている（Al-Ush 1982, p.18, 註6）。

その他の正体解明の試みは、この人物——そして、その名前が出された貨幣——を、後ウマイヤ朝に位置づけている。これらのファルス銅貨に記された日付との年代的な一致から、それらの貨幣を、ヒジュラ暦302年／西暦915年のシャッワール月に任命された、コルドバの市場の役人であるアフマド・ブン・ハビーブ・ブン・バフルールと結び付けているのである⁴⁸⁾。しかしながら、クレシエが指摘しているように（2004, p.216）、実際に名前が同じなのは、10年後、ヒジュラ暦313年／西暦924年に同じ職務に就いたときに言及されている、アフマド・ブン・バフルールという人物である⁴⁹⁾。このような、貨幣のバフルールとコルドバの市場長官の同一視は、これらのファルス銅貨をフォンテンラが命名した「市場の鑄造」と対応させることになる。しかしながら、フォンテンラは、イブン・バフルールの名の貨幣すべてがコルドバの市場の役人に由来するわけではなく、同じ名でこれらの低額貨幣に現れる人物が2人居ると考えている。glbの銘を持つ貨幣に現れる地元の有力者と、それらを持たない貨幣に現れる市場監察役人である（Fontenla 2002, p.38）。

この推理は、依然として議論のあるところである。一市場役人が自分の名前を貨幣に書き込む、という仮定を受け入れなければならない⁵⁰⁾、F. コデラが述べ、G. C. マイルズが追随した、貨幣に記されたバフルールは、グアダルマル・デル・セグラのカリフの城砦の第3メスキータの銘文に現れるバフルールと同一人物であるという可能性と食い違っている⁵¹⁾。

ヒジュラ暦 333 年／西暦 944 年のものとされるこの銘文には、あるメスキータを建設ないし修理するよう命じたアフマド・ブン・バフルールという人物が言及されている (Barceló 2004, p.114)⁵²)。貨幣のバフルールとグアダルマルのメスキータの再建と関連して現れるバフルールが同一人物だと何人かの研究者が推測しているものの、貨幣の鑄造と銘文の日付の間には、20 年という大きな年代的相違があり、そのことはクレシエによって指摘されている (Cressier 2004, p.216)。C. バルセロのような他の研究者は、レヴィ・プロヴァンサルに従って、銘文のバフルールは自立した地方のボスであろうと推測している。

アンダルスの外に、その他の、城砦と結びついたバフルールが存在している。クレシエは、アル・ヤークービーのテキストにおける、「バフルールのメスキータ」と呼ばれるメスキータと、史料群が重要な商業活動について言及している、マッサ海岸における城砦についての記述を指摘している。クレシエは、メスキータに名を与えているこのバフルールが、880 年以前にさかのぼる、マッサの城砦のメスキータの設立者ではないかと解釈している (Cressier 2004, pp.204, 216)。現在のモロッコ大西洋岸の最南端に位置するマッサと、グアダルマルとの間の地理的・年代的な距離は小さくないが、固有名詞と定着の仕方は示唆的である。

9 世紀を通じて城砦の形成が活発であったアグラブ朝の領域においても、城砦と貨幣を結びつけるように見える、1 つの名前の一致がある。マスルール・アルハーディムと呼ばれる、ジヤード・アッラー 1 世の統治下の造幣役人の事例である。この名前は、ヒジュラ暦 206 年－223 年／西暦 821-838 年間のアグラブ朝の貨幣に現れ、ヒジュラ暦 206 年／西暦 821 年のスーサの城砦の銘文においても言及されている (Al-Ush 1982, p.28)。

7. 貨幣と城砦

城砦は、制度としては、国家によっても個人のイニシアティブによっても作られ、軍事や宗教、そして経済など、異なった側面から分析される、複雑な事象である。C. マルティネスがチュニジアのサヘルの事例について研究したように（1997-1998）、これら全ての側面が同時に存在しないといけなわけではなく、また城砦の性質は時の流れの中で変化するものであり、時期によって、中心となる活動も異なる。我々が関心を寄せるテーマに関しては、城砦の経済的側面——おそらく伝統的な歴史学では最も関心を向けられてこなかった側面——が興味深い。商業交易が行われた中継地としての城砦への考察は、クレシエによって強調されているが（2004）、おそらく最も知られていない側面の1つである。沿岸部に、時には河口のような、幾つかの交通路が合流する戦略的に極めて重要な場所に位置し、今日では我々がとうてい明確に輪郭を描くことが出来ないような、重要な経済的役割を果たしていたに違いない⁵³）。P. チャルメタは、アルシラ（アシーラ）、マーッサ、テネスとモナスティールの諸城砦における^{いち}市の存在を立証している。アンダルス沿岸の城砦における、物資調達のための^{いち}市の存在には疑念を示しているが（Charmeta 2010, 380-2, 386）。クレシエは、チャルメタと G. マルセに従って、城砦と結びついたこれらの^{いち}市の経済的重要性を強調しているが、しかし彼らと反対に、市場は城砦の存在によって成長したものではなく、それ自体の中で相互に結びついて形成された同時代現象であると考えている（Cressier 2004, p.209）。これらの城砦は在地の交易の中心地としても機能したであろうが、とりわけ、長距離海上交易の中継地として機能したであろう。それは、「類似した、互いに結びついた一連の定住地と、交易の一時的なインフラストラクチ



図6 9世紀末の地中海における城砦と商業拠点。P. Cressier, 2004 より。

ヤー、すなわち市の存在^{いち}」を意味する (ibid., p.220)⁵⁴)。いずれにせよ、市場と城砦は相伴うものであった (図6)。

このような観点からすれば、これらの城砦と結びついた貨幣が存在しても不思議はないであろう。第1に、これらの商業の中心地には、交易を容易にするため、貨幣が存在すると考えるのが論理的である。これらの交易活動の多くに、必ずしも貨幣が介在する必要はない。しかし、少なくとも、多くの人が集まったと史料に記されている中継地においては、貨幣が何らかの痕跡は残すはずであろう。これらの貨幣についての記録がもし存在したら、極めて有用な情報を提供してくれるであろうが、しかし実際には、それに関してはほとんど知られていない。現状では、これらの城砦におけるそのような記録も、この問題に強く関係するような一連の貨幣群——例えばイブン・バフルールについての言及を持つ貨幣群のような——の出所についての情報も、実質的に存在していない。

解明すべきもう1つの疑問は、城砦と、自分たちの貨幣を鑄造しえるような幾つかの商人集団との間の、結び付きの有無である。現在の研究状況では、示唆的な幾つかのデータはあるにせよ、銅貨発行とこれらの城砦の間の関係を確定することは困難である。クレシエによって提起され、部分

的にギシャールによって示唆された、これらの沿岸の中継地で活動し、商業的また精神的な利害に基づいて自治的な共同体を形成していた商人集団の存在は、コルドバの造幣所が——少なくとも銀貨に関して——公式な貨幣の発行を行っていなかったある時期における、貨幣発行の実現に有利に働いたであろう。銅貨は長距離交易にもっともふさわしいとは言い難いにせよ、この点でこれらの集団と結びついた貨幣の存在は否定し難い。[※10世紀前半の]カリフ権力の確立までは、テネスやベチーナ、オランを建設したようなこれらの船乗りこそが、西地中海——ある海岸から他方の海岸へ、産物を運びながら進む海——のコントロールを手中にしていたことを忘れてはならない。しかしながら、貨幣による証拠は乏しく、全ての手がかりは不十分である⁵⁵⁾。

このため、この手がかりの銘文の一つにおける同じ系譜を持つある人物への言及によって、イブン・バフルールの名前で鑄造された貨幣とグアルダマルの城砦を結び付けようとする様々な試みが為されたのである。我々があてにできる情報は極めて乏しく、一貫性に欠ける。文書群、メスキータの碑文と、同じ名前が記された貨幣群——大部分は前後関係に乏しく、出所が不明な——は、現段階では、如何なる明確な結論へも到達させてくれない。市場における鑄造貨幣として扱うという仮説は、城砦と結び付いた自治的な発行という仮説とは両立しないように見える。貨幣に現れる名前と史料上の言及との一致以上のものへ新たな議論を進めることが可能になるような、発見貨の特別な位置づけが可能となったら、大変興味深いものとなるのだが。コルドバの市場役人と結び付いた発行として扱うには、これらのファルス銅貨群が、首都コルドバにおいて、確実に形で見出されるのを待たねばなるまい。もし城砦群と結び付いた商人集団による発行と考えるのなら、その拡散範囲は城砦のすぐ近くであらねばなるまい。保管されていた貨幣群の出所がわからないため、現状では、この方面で議論を

進めることは出来ない。

8. 結 論

9世紀末から10世紀初頭にかけて、アル・アンダルスのアミール期の後ウマイヤ朝を襲った政治的・経済的な諸問題の影響は、貨幣状況にはっきりと現れている。領土の多くが在地の有力者たちの支配下に置かれたために徴税が出来ず、また彼らに対する軍事遠征の費用を捻出するのも困難となり、コルドバに置かれていたアンダルス唯一の公的造幣所が閉鎖される、重大な貨幣危機が生じたのである。しかしながら、貨幣供給が不足しても、地中海の他の地域から大量の貨幣がもたらされることはなかった。トゥドミールのダイサム・ブン・イスハークの貨幣と、議論の余地のある一連のファルス銅貨を除いては、アンダルスの他の権力者たちが貨幣を製造することも無かった。

バフルール家の銅貨群と同じく、コルドバの政府による領域コントロールが大きく失われ、貨幣供給が不足する状況の中で、9世紀末から10世紀初頭に現れた、固有の名前や、また幾つかは日付が記され、幾つかの城砦群で铸造された、他のファルス銅貨の貨幣群についても、その発行を支えた権威者に関して、疑問が提示され続けている。貨幣に現れる名前からは、多くの場合、史料における言及との単純な名前の一致に基づいて、それらのファルス銅貨を特定の個人や家系と結び付けようと試みられてきた。古銭学的な調査は、これらの貨幣に示された名前と、アミール権力の外部で領域的支配を行い、新しい国家の建設を望んでいた諸家系の長たちの名前と同定しようと努めてきた。しかしながら、確実な同定を行うことは、今日まで不可能なままである。長期間に渡って広大な領域を支配しつつ独立を維持していた、ウマル・ブン・ハフスーンのような人物に関して

さえも。その他の、各種の主権の印——といっても、最重要なその一つである「貨幣鑄造」以外の——を用いていた重要な自治的権力群に関して。この重要な特権は、現在のところ、トゥドミールのダイサム・ブン・イスハークの事例でしか証明されていない。

ペチーナの元首たちに関しては、固有名に加え、glbの銘が記された一連のファルス銅貨が彼らの発行に帰されている。この事例では、貨幣群に記された名前の中の2つが史料に記されたペチーナの多くの元首たちの名前と一致するという議論に加え、これらの船乗りたちに支配された領域から、これらのファルス銅貨が何枚か発見されている。

それらはおそらく、国家が貨幣を発行していない時期に、そのコントロールから逃れていた領域において、アミールが関与せずに、またはその承認の下で、発行されたものであろう。にも関わらず、先に述べたように、9世紀末における公式な造幣所の閉鎖とそれに続く貨幣の欠乏が、他の領域的権力による多くの鑄造活動をもたらしたようには思われぬ。また外国の多くの貨幣によって、貨幣の不足が息を吹き返したようにも思われぬ。アグラブ朝やイドリース朝などの北アフリカから到来した貨幣や、またアッバース朝のようなさらに東方の領域から到来した貨幣は、数が少なく、当時の貨幣流通にそれほどの——先行研究が伝統的に想定してきたような——影響は無かったに違いない。

現状、既知のデータが示すところでは、アミール期末期の貨幣状況は、9世紀を通じて鑄造されていたアンダルス製のディルハム——断片にされたりされていなかったりしたであろうが、使用され続けていた——でやりくりしていたと考えざるを得ない。この時期に鑄造されていたファルス銅貨については、流通範囲についても発行量についても、我々は知る術を持たない。貴金属による他の鑄造流通物——ダイサム・ブン・イスハークのものや北アフリカに由来するもの——は、ほとんど意味のある存在ではなか

つたに違いない。少なくとも、現段階で我々が参照することのできる古銭学的情報からは、そのように推測できる。

おそらく、発見貨幣の最適な文脈化ができるならば、アミール国の分裂からコルドバのカリフ国の出現にかけてのような、歴史的に非常に興味深い時期についての知見を増すことを可能にする新しいデータを、古銭学の分野が手にすることができるであろう。将来発見される貨幣が——それが現れたコンテキストに即して分析され、他の貨幣の情報との関係の中に位置づけられたら——おそらくそれに役立つくれるであろう。現在のところ、データは頑なに、相互に孤立した状態に留まっている。

注

- 1) 本論文は、以前に出版された、学術雑誌 *Archeologia Medievale* 誌43号掲載の論文の改訂版であり、経済・競争力省による研究プロジェクト、HAR 2015-67111-P「事物の場所：考古学的見地から見た建築空間と物質文化の関係（6-14世紀）」の一環として作成された。
- 2) 訳者註：アル・アンダルスは、現在のスペインのアンダルシア地方を中心とした、イスラーム勢力統治下に置かれていたイベリア半島の諸地域を指す呼称である。なお、「アル」は冠詞であり、しばしば省略されるため、「アンダルス」と書く場合も同義である。
- 3) 訳者註：後ウマイヤ朝（756-1031年）の君主は初め、2世紀近くの間、アミール〔将軍、総督〕を称していたが、アブド・アッラフマーン3世（アミール：912-929年。カリフ：929-961年）治世中の929年からカリフを称するようになった。従って、アミール期は756-929年であり、カリフ期929-1031年と区別される。すなわちアミール期末期は、西暦9世紀後半から10世紀初頭にかけての時期である。この時期の後ウマイヤ朝は衰退期であり、それを立て直してカリフを称したアブド・アッラフマーン3世の治世から最盛期に入ることが知られている。
- 4) 訳者註：リバート *ribāt* は、「ジハードのための砦、ないしスーフィーや聖者の修道場などをさす語」（大塚和夫他編著『岩波イスラーム辞典』岩波書店、2002年、1049頁）であり、本論文中にも説明されている通り、多様な機能を持つ存在である。本論文では、便宜上、「城砦」という訳語で統一している。

- 5) 中央権力がほとんど体系化されていないのに、集約されていない多くの造幣所において極めて多くの貨幣が発行されているという点について、矛盾を指摘する研究者もいる。Martínez 2003 を参照。
- 6) この王朝の貨幣については、既に古典となっている A. F. al-'Ush (1982) と、より最近の A. Fenina (2007) を参照されたい。
- 7) これらのユダヤ商人たちは、ラダニタスとして知られているが、フランクやアンダルスの領域から、マグリブやエジプト、オリエントに至る、重要な商業網を備えていた。これらのラダニタスの諸集団については、Remie 1997, p.105 を参照されたい [訳者註：同書の 30-31, 36, 86-87, 176, 189, 204 頁, 註 48 も参照されたい。また, E. Bareket, "Rādhānites", in N. Roth (ed.), *Medieval Jewish Civilization: An Encyclopedia*, Routledge, 2002, pp.558-561 も参照]。
- 8) この問題については、Manzano 2006, pp.341-354. を参照されたい。
- 9) この事実は、コデラによって指摘されている (F. Codera 1879, p.68)。彼は、アブド・アッラー統治期のディルハム貨はほとんど見たことが無いと述べている。ビベス (A. Vives 1893, p.32) は、アブド・アッラーの治世初期, 275 年から 279 年にかけての幾つかの事例しか挙げていない。マイルズ (G. C. Miles 1950, pp.224-226) は、276-285 年 (西暦 889-899 年) のごく少数の事例にしか言及していないうえ、283 年, 284 年, 285 年の事例にはかなりの疑念を呈している。R. フロチョソ (Frochoso 2009) は、アブド・アッラー統治下で製造されたディルハム貨は 276 年, 278 年, 279 年, 281 年のもののみを挙げている。彼によれば、この年以降、確実にこのアミールが発行した貨幣は知られていない。
- 10) プエブラ・デ・カサージャ (セビーリャ) の一括出土銭のみが、このアミールの埋蔵貨幣を示している。この埋蔵物から、アブド・アッラーの統治下の 5 枚のディルハム貨が同定されたが、一括出土銭全体の 2% にも届かない数である (Ibrāhīm, Canto 1991)。サグラダ・ファミリア・デル・カンポ・デ・ラ・ベルダッドの、290 年・295 年・296 年または 298 年の日付の、コルドバの一括出土銭のディルハム貨は、読み直され、年代が解明されているが、ヒジュラ暦 272 年／西暦 885-6 年以降のものは一切存在していない。
- 11) Ibn Hayyān, *al-Muqtabis* V, translated by M. J. Viguera & F. Corriente 1981, pp.185-186.
- 12) 訳者註：ウマイヤ朝期に形成されたイスラーム圏の貨幣体系は、ディーナール金貨・ディルハム銀貨・ファルス銅貨から成っている。本論文における「ファルス銅貨」は「銅貨」と同義語であると考えて良い。
- 13) ハラフの名が記されたこれらのファルス銅貨については、D. フランセス, J.

- ペレスと R. ロドリゲスが再検討を行った (Francés, Pérez, Rodríguez 2013)。彼らはそれらを3つのグループに分けている。1つはアグラブ朝によるものである。第2のグループは、トレドで発行されたと考えられてきたものだが、彼らは北アフリカ、タンジェの造幣所で作られたものとみなしている。3つ目は造幣所不明のグループで、彼らは、それらが同一の場所で造られた可能性があると指摘している。
- 14) これらの Vives 332 タイプのファルス銅貨は、以前にはラヴォワにより、アッパース朝のものと考えられていた。Lavoix 1887, p.470, n.1650.
- 15) イブン・ハフスーンによる王朝創設の意図については、Martínez Enamorado 2012 を参照。
- 16) ファルス銅貨についての研究は伝統的に多くなく、近年ようやく、以前より研究されるようになった。このため、この種の貨幣についてこそ、新たにデータを整理していく中で、将来的により多くの発見の可能性がある。
- 17) A. デルガードがこのような主張し、他の著者たちもそれに従っている。A. カントによって出版された A. デルガードの手稿文書には、次のように書かれている。「スペインにおいてウマイヤ朝の最初の5代のアミールが支配していた時代には、おそらくアフリカのアグラブ朝によって発行された金貨が流通していた。それらはしばしば我々の標本の中に見いだされる。それらは品質も良く重さも適正で、おそらくこのためにスペインでは金きんが節約され、これらのアミールたちは金貨を発行することを考えなかったのだろう」(Canto 2002, p.111)。
- 18) フォンテンラによれば、アミール期のこのアルメリア地方のアンダラクス渓谷では、貨幣流通はコルドバの銀貨だけではなく、アグラブ朝の金貨と銀貨に基づいていた (Fontenla 1998, p.80)。
- 19) F. マルティン (Martín 2012, p.340) によると、まだ公刊されていない、後ウマイヤ朝や東方、アッパース朝、アグラブ朝のデイルハム貨やカロリング朝のデナリウス貨の破片群を含む貨幣群である。
- 20) この破片には、留め金が1つ付け加えられている。イブラーヒムやカントの見解では、貨幣の日常的な使用の都合に合わせるためのものである (Ibrāhīm, Canto 1991, pp.72)。
- 21) 註 18 を参照。
- 22) この出土貨幣群は、ナバスケスによって2度に渡り紹介されている (1958年と1963年)。F. マルティンは、この貨幣群は貯蓄のために埋蔵されたものではないか、という見解を示している (Martín 2012, p.317, 註23)。
- 23) 史料は彼のアッパース朝やアグラブ朝、後にはファーティマ朝への接近を強調している。近年、この問題についてまとめたものとして、Martínez En-

- amorado 2012, pp.115-127.
- 24) F. Cordera は、ウマル・ブン・ハフスーンが貨幣を鑄造した可能性はかなり高いと考えていた。ボバストロの遺構に——確実な年代はわからないと認めてはいるが——「造幣所 casa de la moneda」として知られる場所が存在していたからである。
- 25) Vives の 322-323 番または Miles の 179 f と 179 g のファルス銅貨のことである。また、Vives 306-307 番の、ヒジュラ暦 268 年／西暦 881-882 年のディルハム貨もそうである。
- 26) 彼の発行とされている他の銅貨の場合も、根拠は確実なものではない。ティンガル（グラナダ）で発見された、glb の銘を持つ 34 枚のファルス銅貨の一括出土銭の場合では、イブン・ハフスーンがアグラブ朝権力と接近していたことを根拠に、彼か、おそらくは彼の同盟者たちの 1 人によって発行された貨幣だと見なされている。
- 27) Ibn Hayyān, *al-Muqtabis* III, ed. M. Antuña 1937, pp.12.
- 28) Al-‘Ush 1982, p.117, n.273. Vives 340 タイプ。
- 29) Ibn Hayyān, *al-Muqtabis* III, ed. M. Antuña 1937, pp.9, 24, 117-118.
- 30) Al-‘Udrī ed., *Al-Ahwānī*, 1965, pp.11-12, Molina 1972, pp.77-79.
- 31) これらの貨幣発行についてのより詳細な分析は、Doménech, Guichard 2015 にある。
- 32) アミールによるディルハム貨には名前が無く、統治しているアミールの名が記されることも決してない。おそらく、後ウマイヤ朝の発行する貨幣の公式な銘の採用が、明白な服従の印だったのであろう。とはいえ、カバネスのディルハム貨は、ダイサム・ブン・イスハークがその最後の日々まで、自らの貨幣の鑄造は既に君主の印であるという考えを失うことなく、貨幣に自分の名を記し続けたことを示してはいるのだが。
- 33) Ibn al-Qūtiyya, translated by J. Ribera, pp.108-109.
- 34) E. マンサノ (2006, pp.349-359) によって、他の諸遠征についてもこの見解が強調されている。
- 35) Ibn Hayyān, *al-Muqtabis* III, ed. M. Antuña 1937, p.87-89.
- 36) *Ibid.*, p.117.
- 37) Al-Himyarī, *Mi’tār*, pp.47-48.
- 38) *Ibid.*, p.82.
- 39) 船乗りたちと海賊行為についての詳細な分析は、Guichard 1987 を参照。
- 40) Vives の 337-340 タイプと、343 タイプである。
- 41) Ibn Hayyān, *al-Muqtabis* V, 1981, p.93.
- 42) *Ibid.*, p.93.

- 43) Vives 337のタイプにあたる。この研究者は22例を挙げ、フォンテンラは、アルメリア地域で発見された5例を付け加えている (Fontenla 1996, p.312)。なお、その他のタイプは2人の研究者の間で、1例から5例の間で変動している。
- 44) 先の銘について、アル・ウシュラの研究者によってアグラブ朝の貨幣と見做され、またセビーリヤの反乱者イブラーヒーム・ブン・ハッジャー・ジュの発行でもありうるといふ仮説が出されている、イブラーヒームの名を記した貨幣についての議論は、この論文の註27を参照されたい。Miles 1950, p.55と Frochoso 2001, p.91も参照。
- 45) T. イブラーヒームはヒジュラ暦305年の貨幣を確認し、A. ビベスによって採取された2つの年に付け加えている。Ibrāhīm 1996, p.293.
- 46) アル・マーリキーがその *Riṭyādāl-Nufūs* の中で言及し、またイブン・イザリー Ibn'Idārī も言及している (II, p.89)。
- 47) Ibn'Idārī が言及している (II, p.89)
- 48) Ibn Hayyān, *al-Muqtabis* V, p.67. 1981年の M. J. Viguera と F. Corriente による翻訳では87頁。Ibn'Idārī II, p.203.
- 49) G. C. マイルズなどの研究者は、同じ人物を指しているとしている。Miles 1950, I, p.58. 他方で、その他の研究者は、同一家系で職務を引き継いだ、2人の異なる人物だと考えている。Cressier 2004, p.216.
- 50) この仮定を明確に擁護しているのが、Fontenla 2002, pp.37-38である。
- 51) アンダルスの南東、セグラ河の河口に位置し、多くの研究の対象となってきた城砦のことである。アスアルの、先行研究の文献一覧付きの、1989年と2004年の著作を参照されたい。
- 52) グアルダマルの銘文は、C. バルセロによって、先行するすべての解釈を網羅しつつ、多くの刊行物において深く研究されている。最も新しいものは2004年で、先行研究文献の一覧を含んでいる。
- 53) C. マルティネスは、複数の城砦について、航海の支援と監視のための灯台システムで海岸に目印をつけることを目的とした、監視塔の存在を強調している (Martínez Salvador 1997-98, p.256)。考古学的には、9世紀におけるその存在を確実に証明することは出来ないのではあるが。
- 54) R. アスアルは、幾つかのアンダルスの城砦は、9世紀の終わりに、船乗りたちの集団によって、アミール国の弱体化を利用しつつ、彼らの中継拠点を「西地中海に真の商業ルートを形成するに至るまでの、城砦群の設立に基づいた政策によって」強化すべく、商業拠点また交易地として設立されたという可能性さえも提起している (Azuar 2004 & 2005)。
- 55) この時期の地中海商業に関しては、現在行われている、フランスのプロヴァ

ンス地方の海に沈んでいたアンダルスの物産の積荷の分析が重要である。C. Richarté & S. Gutiérrez, 2015 を参照。

アラビア語史料（スペイン語への翻訳版含む）

- ・ AL-‘UDRĪ : *Fragmentos geográfico-históricos de al-Masālik ilā jamī‘ al-mamālik, edición Al-Ahwānī*, Madrid, 1965.
- ・ AL-ḤIMYARĪ : *Kitāb ar-Rawḍ al-Mi‘yār, edición y traducción É. LÉVI PROVENÇAL : La péninsule Ibérique au Moyen Âge d’après le Kitāb ar-Rawḍ al-Mi‘yār fī ḥabar al-aḳṭār d’Ibn ‘Abd al-Mun‘im al-Ḥimyarī*, Leiden 1938.
- ・ AL-MĀLIKĪ : *Riyāḍ al-Nufūs, edición B. al-Bakkūsh, y revisión Muḥammad al-‘Arūsī*, Beirut, 1981-1984.
- ・ IBN AL QŪTIYYA : *Tārīḥ Ifitāḥ al-Andalus, traducción de Julián Ribera. Colección de Obras Arábigas de Historia y Geografía, Real Academia de la Historia, tomo II*, Madrid, 1926.
- ・ IBN ḤAYYĀN : *al-Muqtabis, III, edición de P. Melchor M. Antuña*, París, 1937.
- ・ IBN ḤAYYĀN : *al-Muqtabis V, traducción de M. J. Viguera y F. Corriente*, Zaragoza, 1981.
- ・ IBN ‘IDĀRĪ : *al-Bayān al-Mugrib*, Leiden 1948.

参考文献

- ・ ACIÉN M., 1997, *Entre el feudalismo y el Islam. ‘Umar ibn Hafṣūn en los historiadores, en las fuentes y en la historia*, Universidad de Jaén, 2º ed., Jaén.
- ・ AL-‘USH Abū l-Faradj, 1982, *Monnaies aghlabides*, Institut Français de Damas Damasco.
- ・ AZUAR R. (dir.), 1989, *La rābīta califal de las dunas de Guardamar (Alicante)*, Memorias excavaciones arqueológicas Museo Arqueológico, Alicante.
- ・ AZUAR R., 1995, *Atalayas, almenaras y rābitas*, en J. VERNET (coord.) *Al-Andalus y el Mediterráneo*, Granada, El Legado Andalúsí, pp.67-76.
- ・ AZUAR R., 2004, *De ribāṭ a rābīta*, en R. AZUAR (coord.), *Fouilles de la Rābīta de Guardamar I. El ribāṭ califal. Excavaciones e investigaciones (1984-1992)*, Madrid, pp.223-236.
- ・ AZUAR R., 2005, *Piratería y rābitas en la formación del Sharq al-Andalus*, «*Arqueología medieval*» 9, (2005), pp.147-159.
- ・ BARCELÓ C., 2004, *Los escritos árabes de la rābīta de Guardamar*, en R. AZUAR (coord.), *Fouilles de la Rābīta de Guardamar I. El ribat califal. Excavaciones e investigaciones (1984-1992)*, Madrid, pp.131-145.

- CANTO A., 2002, *Moneda foránea en al-Andalus*, Actas del X Congreso Nacional de Numismática (Albacete 1998), Madrid, pp.107-128.
- CANTO A. y MARSAL E., 1986, *On the metrology of the silver coinage of de Spanish Amirate*, en M. GOMES y M. CRUSAFONT (eds.) : *Problems of Medieval Coinage in the Iberian Area 2*, Avilés, pp.167-180.
- CARMONA R. y HINOJOSA A. R., 1999, *Un conjunto monetario andalusí de plata emiral procedente de la Junta de los Ríos (Priego de Córdoba)*, «Antiquitas» 10 (1999), pp.125-136.
- CASTRO M., 2000, *Una nueva aproximación a las emisiones del Emirato Independiente (138-316/755 (6)-928 d.C) y su alcance social*, «Arqueología y Territorio Medieval» 7 (2000), pp.171-184.
- CRESSIER P., 2004, *De un ribāt a otro. Una hipótesis sobre los ribāt-s del Magrib al-Aqṣā (siglo IX – inicios del siglo XI)*, en AZUAR R. (coord.), *Fouilles de la Rábita de Guardamar I. El ribat califal. Excavaciones e investigaciones (1984-1992)*, Madrid, pp.203-221.
- CODERA F., 1879, *Tratado de Numismática árabe-española*, Madrid, ed. facsimil 1977.
- CHALMETA P., 2010, *El zoco medieval. Contribución al estudio de la historia del mercado*, Almería : Fundación Ibn Tufayl de Estudios árabes.
- DOMÉNECH C. y GUICHARD, P., 2015, *Monnaies émises par des “rebelles” . Quelques remarques sur des frappes monétaires “non officielles” en Ifríqiya et en al-Andalus au IXe siècle*, en Ph. SÉNAC, (ed.) : *Villa 5 : Monnaies du haut Moyen Âge : histoire et archéologie (péninsule Ibérique-Maghreb, VII^e-XI^e siècle)*, Toulouse, Colección Méridiennes, Serie de «Études Médiévales Ibériques», pp.211-232.
- DOMÉNECH C. y GUTIÉRREZ S., 2006, *Viejas y nuevas monedas en la ciudad emiral de madīnat Ḥyyuh*, «al-Qantara» XXVII, fasc.2 (2006), pp.337-374.
- FENINA A., 2007, *La monnaie aghlabide (184-296/800-909)*, en A. FENINA (coord.), A. KHIRI (dir.), *Numismatique et histoire de la monnaie en Tunisie*, t. II. *Monnaies islamiques*, Túnez (Banque centrale de Tunisie, Collections monétaires), pp.45-73.
- FONTENLA S., 1995, *Las acuñaciones medievales de Lorca*, Lorca.
- FONTENLA S., 1996, *Acuñaciones numismáticas de los marinos de Pechina*, «Numisma» 237 (1996), pp.307-314.
- FONTENLA S., 1998, *Un tesoro de plata medieval del Tiján (Turre, Almería)*, «Axarquía» 3 (1998), pp.77-81.
- FONTENLA, S., 2002, *Aportación a los feluses andalusíes*, «Gaceta Numismática»

- 147 (2002), pp.35-41.
- FONTENLA S., 2007, *La circulación monetaria en el Valle del Almanzora (Almería) : edades antigua y media*, Lorca, editorial fajardo el Bravo.
 - FRANCÉS D., PÉREZ J. y RODRÍGUEZ R., 2010, *Una aproximación al felús aglabí y su contexto en al-Andalus*, «Numisma» 254 (2010), pp.41-59.
 - FRANCÉS D., PÉREZ J. y RODRÍGUEZ R., 2013, *Los feluses con nombre Jalaf. Nuevas aportaciones*, «Omni» 7 (2013), pp.128-134.
 - FROCHOSO R., 2001, *Los feluses de al-Andalus*, Madrid, Numismática cordobesa.
 - FROCHOSO R., 2002, *Las acuñaciones de Daysam ben Ishaq. Nuevas aportaciones*, «Gaceta Numismática» 146 (2002), pp.25-27.
 - FROCHOSO R., 2009, *El dirham andalusí en el Emirato de Córdoba*, Real Academia de la Historia y Real Academia de Córdoba.
 - GUICHARD, P., 1987, *Los inicios de la piratería andalusí en el Mediterráneo occidental (798-813)*, en *Estudios sobre historia medieval*, Valencia, Edicions Alfons el Magnànim, pp.73-103.
 - GUICHARD, P., 1995, *Actividad marítima y poblamiento*, en *Al-Andalus y el Mediterráneo*, Granada, El Legado Andalusí, pp.37-46.
 - IBRĀHĪM, T., 1996, *Miscelánea de Numismática andalusí*, «Numisma» 237 (1996), pp.291-305.
 - IBRĀHĪM, T. y CANTO A., 1991, *Hallazgo emiral de Puebla de Cazalla (Sevilla)*, «Numisma» 229 (1991) pp.69-86.
 - LAVOIX, H., 1887, *Catalogue des monnaies musulmanes de la Bibliothèque Nationale. Khalifés orientaux*, Paris.
 - LÉVI PROVENÇAL, E., 1950, *La fédération des marins de Péchina a la fin du IX^e siècle*, en *Histoire de l'Espagne Musulmane I*, Paris y Leiden, pp.348-355.
 - LIROLA J., 1993, *El poder naval de al-Andalus en la época del Califato omeya*, Granada, Universidad de Granada e Instituto de Estudios Almerienses.
 - MANZANO E., 1998, *El desarrollo económico de las ciudades idrisíes : la evidencia numismática*, en P. CRESSIER, y M. GARCÍA-ARENAL, (eds.) *Genèse de la ville islamique en al-Andalus et au Maghreb occidental*, Madrid, pp.353-375.
 - MANZANO E., 2006, *Conquistadores, emires y califas*, Barcelona. Ed. Crítica.
 - MARTÍN F., 2012, *Monedas que van, monedas que vienen . . . circulación monetaria en época de cambios*, en *Actas de la XXXIX Semana de Estudios Medievales, De Mahoma a Carlomagno*, Estella, pp.311-350.
 - MARTÍN F.; CEPAS, A. Y CANTO A., 2004, *Archivo del Gabinete Numario. Catálogo e índices*, Madrid, Real Academia de la Historia.

- MARTÍNEZ ENAMORADO, V., 2003, *Idrisies y Omeyas. La gestión de dos estados en el occidente musulmán* en Catálogo de exposición Triángulo de al-Andalus. El legado andalusí, Rabat 2003-2004.
- MARTÍNEZ ENAMORADO, V., 2012, *'Umar b. Hafṣūn, de la rebeldía a la construcción de la Dawla. Estudios en torno al rebelde de al-Andalus (880-928)*, Costa Rica, Universidad de Costa Rica.
- MARTÍNEZ SALVADOR, C., 1997-98, *Arquitectura del ribat en el Sahel tunecino: modelo y evolución*, «Anales de Prehistoria y Arqueología» 13-14, pp.251-269.
- MILES, G. C., 1950, *The Coinage of the Umayyads of Spain*, New York, American Numismatic Society.
- MOLINA E., 1972, *La cora de Tudmir según Al-'Uḍrī (s. XI)*, «Cuadernos de historia del Islam» 3.
- MOTOS E. y DÍAZ A., 1990, *Hallazgo en Tíngar (Granada) de feluses de tipo Al-Aḡlab de finales del Emirato*, II Jarique de Numismática Hispano-árab (Lérida 1988), Institut d'Estudis Ilerdencs, Lérida, pp.163-176.
- NAVASCUÉS, J., 1958, *Estudios de Numismática Musulmana occidental*, «Numario Hispánico» VII, Madrid, pp.49-55.
- NAVASCUÉS, J., 1963, *Tesorillo de cobre romano-musulmán de Córdoba*, «Memoria de los Museos Arqueológicos Provinciales» 1958-1961, Madrid, pp.80-81.
- RICHARTÉ, C.; GUTIÉRREZ LLORET, S.2015: *Les céramiques importées sur les côtes provençales comme témoignage des échanges matériels entre le domaine islamique et l'Occident des VIIIe-Xe siècle*, in Héritages arabo-islamiques dans l'Europe méditerranéenne (MuCEM Marseille, 11-14 septembre 2013). La Découverte, Paris, 2015, pp.209-227.
- REMIE O., 1997, *Comercio y comerciantes en la España musulmana. La reordenación comercial de la Península Ibérica del 900 al 1500*, Barcelona, Ed. Omega.
- RODRÍGUEZ R., 2006, *Moneda 'abbāsī en al-Andalus. Noticia de un hallazgo*, «Gaceta Numismática» 162-163 (2006), pp.17-24.
- ROLDÁN F., 1995, *Al-Andalus y el Mediterráneo: Itinerarios, en Al-Andalus y el Mediterráneo*, Granada, El Legado Andalusí, pp.77-87.
- ROMA A., SERRANO A. y COLINO J., 2004, *En torno a los feluses Idrisies de Marruecos*, «Gaceta Numismática», 154 (2004), pp.41-52.
- RUIZ J. M., 1967, *Tesorillo de dirhemes del Emirato hallado en la Lantejuela* «Numisma», 84-89 (1967), pp.27-50.
- SALVATIERRA V., 2001, *La crisis del Emirato Omeya en el Alto Guadalquivir. Precisiones sobre la geografía de la rebelión muladí*, Jaén, Universidad de Jaén.

- TELLES M., 1999, *Restos de tesouro de moedas islâmicas nas imediações de Azóia (Sesimbra)*, «Arqueologia Medieval» 6 (1999), pp.133-137.
- VEGA M. y PEÑA S., 2000-2001, *El espacio numismático ibero-magrebí y los fondos del Museo Arqueológico y Etnológico de Granada*, «Al-Andalus Magreb. Estudios árabes e islámicos» 8-9(1) (2001), pp.65-113.
- VEGA M. y PEÑA S., 2002, *Del hallazgo de dirhames emirales en Domingo Pérez (Iznalloz, Granada)*, «Al-Qanṭara» XXIII, fasc.1 (2002), pp.155-192.
- VEGA M. y PEÑA, S., 2004, *Sobre el hallazgo emiral del Campo de la Verdad*, Actas del XII Congreso Nacional de Numismática (Madrid 2004), Madrid-Segovia, pp.403-416.
- VIVES A., 1893, *Monedas de las dinastías árabe-españolas*, Madrid, Ed. Cayon.

